

〔資料紹介〕

弘前市中別所の天明飢饉供養塔

関根達人

はじめに

人類の歴史は飢えや病との戦いの歴史であり、それは現在も続いている。国連がまとめた二〇一八年版「世界の食料安全保障と栄養の現状」報告書によれば、今なお地球上ではおよそ九人に一人が飢えに苦しんでおり、ここ数年、状況は悪化する傾向にあるという。その原因として挙げられているのが、降雨パターンや作物生育期に影響を及ぼす気候変動性や、干ばつや洪水等の極端な気象現象、紛争や景気後退である。紛争や景気後退はもちろん、近年の異常気象も人間活動が大きく影響している。歴史上、飢え（食料不足）により失われた命は、地震や津波、火山噴火などの自然災害や戦争、疫病に起因する犠牲者よりも桁違いに多い。飢饉は様々な災害のなかでも、その社会が抱える本質的な矛盾や弱点を最も明瞭な形で暴き出す。都市と農村の分離のうえに、権力と資本が集中した消費都市を食料生産地である農村が支える形が確立した江戸時代は、都市の論理に農村が従属させられており、飢饉の発生する構造はいつそう社会経済的となったとされる（菊池二〇〇〇）。

一般に江戸の四大飢饉といわれる寛永の飢饉（一六四〇～四三年）、

享保の飢饉（一七三二年）、天明の飢饉（一七八三・八四年）、天保の飢饉（一八三三～三六年）のうち、享保の飢饉以外は東北地方の被害が甚大であった。東北地方の飢饉の多くは異常低温や日照不足など冷害型の凶作が引き金となっている。気候変動の歴史から見て一三世紀の終わりとから地球は「小氷河期」に入っており、一七世紀半ばころから一八世紀初め（マウンダー極小期）と、一八七〇年代から一九三〇年代には著しい寒冷化が生じていた（桜井二〇〇三）。東北地方では、江戸中期以降、天明の飢饉や天保の飢饉以外にも、元禄の飢饉（一六九五・九六年）、や宝暦の飢饉（一七五五）など多くの餓死者を出す飢饉が頻発した。飢饉で亡くなった人々のために建てられた供養塔は、東北から九州まで、全国各地にみられるが、とりわけ飢饉が頻発した東北地方に多く、餓死供養塔とも呼ばれている。

筆者は二〇〇四～〇六年度、科学研究費「供養塔の基礎的調査に基づく飢饉と近世社会システムの研究」（課題番号1652459）により、青森県内で飢饉供養塔の悉皆調査を行った（関根編二〇〇四・〇五、関根・菊池・長谷川二〇〇七）。その結果、津軽地方では元禄の飢饉二基、天明の飢饉九八基、天保の飢饉四基の計一〇四基の飢饉供養塔を確認し

た。南部・下北地方では、宝暦の飢饉一基、天明の飢饉一九基、天保の飢饉四基の合計二四基の飢饉供養塔を確認したが、飢饉供養塔とは断定できないがその可能性のあるものを含めても総数四三基である。宮城県では飢饉在銘供養碑として九二基が報告されているが（三原一九六二）、このうち飢饉供養塔と断定できるものは八一基で、内訳は、宝暦の飢饉一基、天明の飢饉三九基、天保の飢饉四一基となる。津軽地方は全国で最も多く飢饉供養塔が建てられた地域といえる。

筆者は津軽地方の飢饉供養塔の造立について次のように考察した（関根二〇〇五）。元禄の飢饉では、弘前と青森に住む富裕な有力町人が施主となり、施行（非人）小屋に隣接する無縁者の大規模遺体埋葬場（「イコク穴」）に供養塔が建てられたのに対して、天明の飢饉では回忌の際に村どうしが競い合うように飢饉供養塔の造立ブームが起き、飢饉供養塔が地域社会の復興・再生のシンボルの役割を果たした。天保の飢饉では、弘前城下の商人の呼びかけで施行小屋に隣接する和徳専修寺に、弘前周辺の四〇町村六三九〇名の手伝いにより国内最大の飢饉供養塔が建てられた結果、周辺の村で飢饉供養塔が建てられることははばなくなつた。

飢饉供養塔の悉皆調査から約二〇年、この間、調査漏れがないかずっと気にしていたが、このたび弘前市内で未報告の重要な飢饉供養塔が見つかったため、ここに紹介する。

一 中別所の天明飢饉供養塔と共存する石造物

本稿で紹介する天明飢饉供養塔は岩木山の東麓、弘前市中別所狐沢六番地に所在し、中別所と宮館の旧村境に位置する。飢饉供養塔は宮館の稲荷神社の西側、県道三五号五所川原岩木線と弥生方面に向かう道路の交差点から少し西に入った場所にある。以前は県道に面して家屋と樹木があり、その陰に隠れていたが、二年ほど前に家屋は解体、樹木も伐採され、現在は県道からも目視できる（図1）。飢饉供養塔の側には道路に接して安永四年（一七七五）に宮館村と中別所村の講中が建てた庚申塔と弘化三年（一八四六）に中別所村が建てた庚申塔があったが、通学の際に倒壊の危険があるとして、現在は宮館稲荷神社境内に移設されている。その際、飢饉供養塔も一緒に移設する計画もあったが、餓死者の遺体が下に埋まっていると言い伝えられてきたため、移設は行われなかったという。

飢饉供養塔は高さ一四九センチメートル、幅九〇センチメートル、厚さ三八センチメートルの縦長板状の自然石で、岩木山から産出する輝石安山岩が使われている。碑文は正面のみで、中央の円相とその下の名号を挟んで左右に造立年月日である「天明三癸卯年二月日」、右側に「餓死供養塚」、左側に施主名「對馬弥五左衛門」が刻まれている（図2・3）。

青森県内の飢饉供養塔は「供養塔（等）」や「無縁塔（等）」、「精霊塔（等）」と刻むのが一般的で、「供養塚」と彫られたものは本例のみである。前述の弘前和徳専修寺をはじめ、青森市本町旧蓮華寺（三内霊園に移設）、青森市油川浄満寺千人塚、三戸町斗内の千人塚など、飢饉の犠牲者の埋葬地の上に建てられた供養塔は少なくない。「餓死供養塚」と記された本供養塔もまた村境の埋葬地の上に建てられていると考えられ



1 飢饉供養塔の位置(●)

ベースマップには「弘前広域都市計画図(岩木町)」(1996年8月修正)を使用



2 遠景



3 近景

図1 飢饉供養塔の位置と遠景・近景

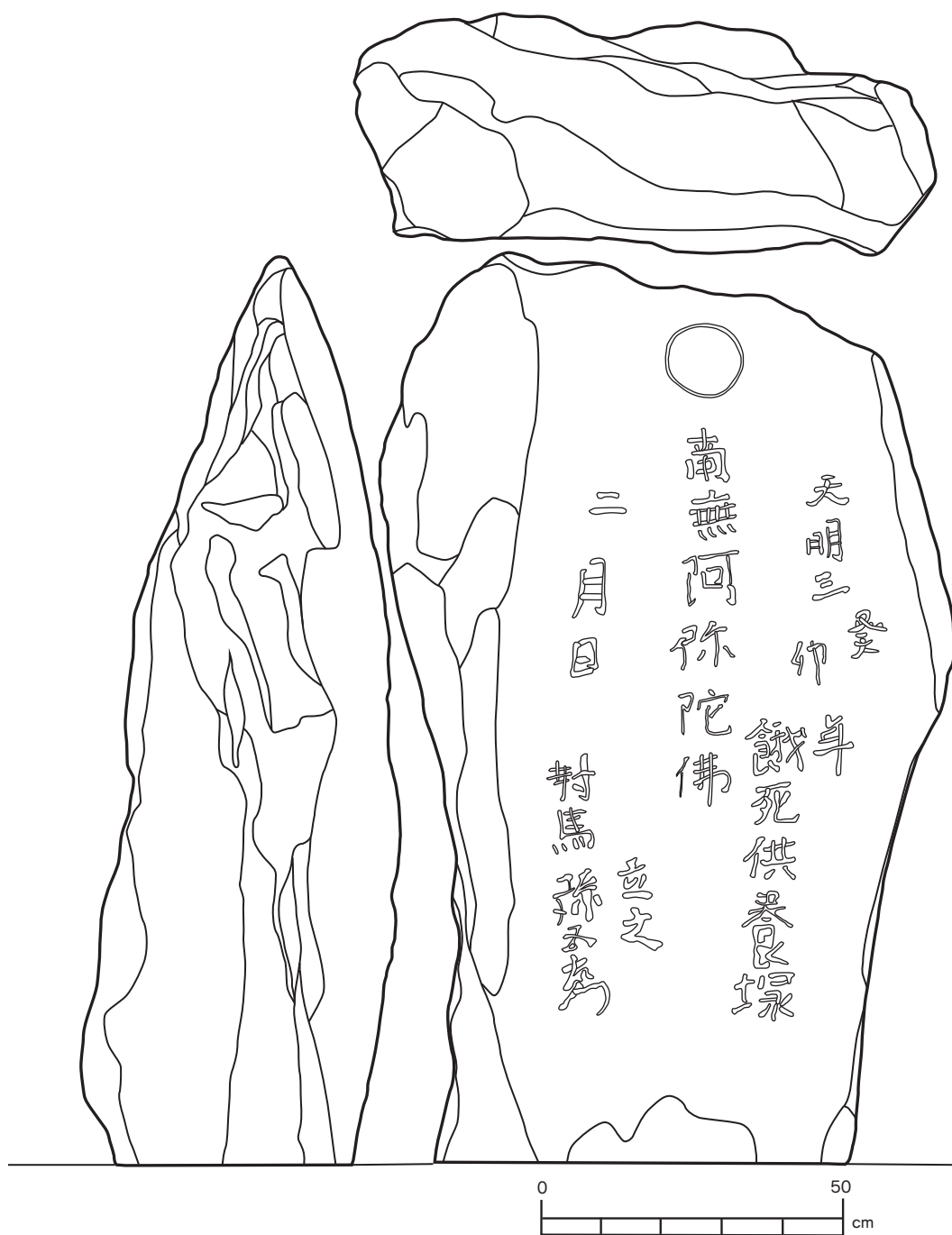
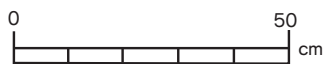


图2 飢饉供養塔 (1)



南無阿彌陀佛

天明三^癸卯年

餓死供養塚

二月日

立之

對馬弥五左工門

図3 飢饉供養塔 (2)

る。

注目されるのは、天明三年（一七八三）二月の造立年月である。これまで青森県内で確認した天明の飢饉供養塔で最も古いのは、八戸市新井田の対泉院にある天明四年二月一日に建てられた餓死萬霊等供養塔（県史跡）であり、本例はそれより一年一〇ヶ月も遡る最古の天明飢饉供養塔である。一般に天明の飢饉は、天明三年（卯年）、同四年（辰年）の二ヶ年の大凶作によって引き起こされたとき、[卯辰]が天明の飢饉を指す固有名詞化しており、飢饉供養塔にも「卯辰」の文字が多く使われている。中別所の飢饉供養塔が建てられた天明三年二月はまだ飢饉が本格化していないとみるのが一般的といえよう。天明二年は西日本で米が不作で、諸国四割の減収となり米価は全国的に高値であったことから、弘前藩や仙台藩などの東北諸藩は翌三年の端境期にかけ、根こそぎ領内の米を急ぎ大坂や江戸に回米して儲けようとして裏目に出たという（菊池前掲）。こうした「飢饉移出」（中井一九七二）が飢饉の被害を拡大させたわけだが、弘前藩領内ではそうした誤った政治的判断によって、天明三年の初めから既に餓死者が多数出ていた可能性が高いことを本供養塔は物語っている。天明の飢饉の推移については再考する必要がある。

前述の通り、津軽地方では天明の飢饉供養塔の多くは村単位で建てられているが、中別所の飢饉供養塔は對馬弥五左衛門という個人が建てている。對馬弥五左衛門は宮館村きつての旧家對馬家の当主で、對馬家の庭園瑞樂園は国名勝に指定されている。對馬家では五代、八代、一〇代・一一代・一三代・一六代・一八代目当主が弥五左衛門を名乗っている。

（中村一九二八）。年代的にみて供養塔を建てたのは庄屋を務めていた十六代目の可能性が高い。なお一七代目の久次郎は文化一〇・一一年（一八一三・一四）の凶作の際に御用達米二〇俵を藩に上納している（中村前掲）。

天明の飢饉供養塔の傍らには文政二年（一八一九）建立の地蔵尊一基、安政四年（一八五七）建立の地蔵尊二基がある（図4）。後者は一基に三体の地蔵が彫られており、二基セットで六地蔵を構成していたと考えられる。

二 岩木山東麓における天明飢饉供養塔の造立活動

村や講などが施主となって回忌に合わせて建てられた津軽地方の天明飢饉供養塔は、ある一定の地域に似通ったものが分布している（関根二〇〇五）。本稿で紹介した中別所の天明飢饉供養塔のある岩木山東麓には、中別所例と同様、縦長板状不定形の輝石安山岩の正面に円相と名号を刻むタイプの飢饉供養塔が分布している（図5）。最初に建てられたのが中別所（1）で、次に一七回忌にあたる寛政一二年（一八〇〇）に一町田村・澤山村合同（2）と葛原村・宮地村合同（3）の二基、二三回忌にあたる文化三年（一八〇六）には賀田村（4）と宮地村（5）の二基、二七回忌にあたる文化七年には八幡村（6）、高屋村（7）、新岡村（8）の三基が造立されている。これら年回忌に合わせて村が建てた供養塔のモデルになったのが、中別所の飢饉供養塔と考えられる。

一七回忌に建てられた二基がいずれも二つの村の合同で建てられてい



図4 飢饉供養塔の側にある石造物



図5 岩木山東麓に分布する円相と名号を持つ天明飢饉供養塔

るのに対して、二三回忌の二基と二七回忌の三基は全て単独の村が建てている。この地域では一七回忌にあたる寛政一二年の段階ではまだ復興の途上で一つの村では供養塔を建てるのが難しかったが、二三回忌にあたる文化三年頃には一つの村でも供養塔を建てられるまでに地域社会が復興したとみることができよう。なおこの地域には、他にも宮館共同墓地に五〇回忌にあたる天保四年（一八三三）五月一日に中別所村の長兵衛が建てた天明飢饉供養塔がある（関根編二〇〇四）。それは他のものと異なり円相や名号を持たない。天明の飢饉から半世紀、最初に飢饉供養塔を建てた對馬弥五左衛門の記憶は風化しつつあったのかもしれない。

まとめにかえて

本稿で紹介した中別所の飢饉供養塔は、天明の飢饉が本格化する以前と捉えられてきた天明三年二月に餓死者の埋葬地の上に建てられており、飢饉の人的被害が従来考えられてきたよりも半年近く前から生じていたことを示している。目の前で起きている天明の飢饉の惨状を見かねて最初に供養塔を建てたのは、村や講などの地域共同体でも都市の有力商人でも僧侶でもなく、村の庄屋であった。彼の志はやがて周辺の村々へと引き継がれ、復興が見えてきた一七回忌以降、岩木山の東麓では最初に建てられた中別所の飢饉供養塔を手本として供養塔が営まれていく。中別所の飢饉供養塔を加え、津軽の天明飢饉供養塔は九九基となった。飢饉供養塔や津波碑などの災害碑は近年注目を集めるダークツーリ

ズムの格好の素材であり、過去の悲劇を後世に伝える「歴史の証人」と呼べるだろう（関根二〇二〇）。国内で最も数が多い津軽の飢饉供養塔は未曾有の歴史災害を伝えており、人類史において特に重要な記録物を国際的に登録するユネスコの「世界の記憶」遺産に値するのではなからうか。

【謝辞】 飢饉供養塔の施主である對馬弥五左衛門に関して、弘前市教育委員会の小石川透氏からご教示を得た。末筆ではありますが、感謝申し上げます。

引用文献

- 菊池勇夫二〇〇〇『飢饉 飢えと食の日本史』集英社
- 桜井邦朋二〇〇三『夏が来なかった時代』吉川弘文館歴史文化ライブラリー一六
- 関根達人二〇〇五「飢饉供養塔からみた北奥近世社会の一側面」『歴史』一〇五、四九―七〇頁、東北史学会
- 関根達人二〇二〇『石に刻まれた江戸時代』吉川弘文館歴史文化ライブラリー四九八
- 関根達人編二〇〇四『津軽の飢饉供養塔』弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告Ⅲ
- 関根達人編二〇〇五『下北・南部の飢饉供養塔 補遺津軽の飢饉供養塔』弘前大学人文学部文化財論ゼミナール調査報告Ⅴ
- 関根達人・菊池勇夫・長谷川成一二〇〇七『供養塔の基礎的調査に基づ

く飢饉と近世社会システムの研究』平成一六年度～平成一八年度科学研究費補助金(基盤研究C2) 研究成果報告書

中井信彦一九七一『転換期幕藩制の研究』塙書房

中村良之進一九二八『青森県中津軽郡船澤村郷土史』船澤村役場

三原良吉一九六二「飢饉金石文」『宮城縣史』二二(災害) 二二三～二九四頁

(せきね・たつひと 弘前大学人文社会科学部教授)